

大斎節前主日 ルカ9章28―36節

〔直訳〕

28 だが起こった

これらの言葉の後に およそ八の日に、
「そして」連れて ペトロとヨハネとヤコブを、
彼は登った 山の中へ 祈るために。

29 そして 起こった

彼が祈っていることにおいて、
彼の顔の様子は 違うもの、

そして 彼の衣服が 白く 輝きながら。

30 そして 見よ 二人の人が 語り合っていた 彼と、

ところの者は あった モーセとエリヤで、

31 ところの者は 栄光において現れて

語っていた 彼の出発を、
ところの 彼がまさに成就しようとしていた エルサレムで。

32 だがペトロは そして彼と一緒にいる者たちは いた 重たくなって 眠気で。

だがすっかり目覚めて 彼らを見た

彼の栄光を そして 二人の人を 彼と一緒に立っている者たちを。

33 そして 起こった

彼から彼らが離れることにおいて

言った ペトロは イエスに向けて、

「先生、良い である 私たちが ここに いることは、

そして 私たちは造りましょう 三つの幕屋を、

一つを あなたに そして一つを モーセに そして一つを エリヤに。」

わかっていないで 彼が言うところのことを。

34 だがこれらを 彼が 言っていると、

起こった 雲が そして 覆っていた 彼らを。

だが彼らは恐れた 彼らが入ることにおいて 雲の中へ。

35 そして 声が 起こった 雲から 言いながら、

「これは ある 私の子で 選び出された者で、

彼に あなたがたは聞きなさい。」

36 そして 声が起こることにおいて、

見いだされた イエスが ひとり。

そして 彼らは 黙っていた そして 誰にも彼らは告げなかった

それらの日々において 何ごとも ところの 彼らが見た。

〔新共同訳〕

28 この話をしてから八日ほどたつたとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29 祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。30 見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。31 二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。32 ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。33 その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここに居るのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。34 ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。35 すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。36 その声が出たとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

①構成

㉓ 28節

一行目の「起こった：」はルカが好んで用いる構文で、二行目に時を表す表現が続き、三行目以下に「起こった」出来事を示す文章が来る。従って、ここを直訳すれば、「これらの言葉の後に、およそ八日の日々に、…を連れて、…山に登るといふことが起こった」となる。この構文は生じた出来事に注意を向けさせ、新たな段落の開始を示すとき、また特に重要なことを述べるときに使われる。29節と33節でも同じ構文が使われている。

㉔ 29—31節

ルカの好む構文を使って強調することは、栄光に輝くイエスの変容であり、「栄光において」現れ、イエスの「出発」について語るモーセとエリヤの登場である。

㉕ 32—33節

眠気を払いのけた弟子たちはイエスの栄光と二人の人を目にするが、彼らが語っていた「彼の出発」には注意を向けることができない。この素晴らしい栄光をどのようにして留めようかと考えることに懸命になっている。

㉖ 34—35節

神は雲の中からペトロたちに語りかけ、ペトロの提案を訂正する。栄光を地上に留めようとせず

㉗ 36節

この節は28節と対応している。29—35節では、天上の世界を描く29—31節と34—35節が、人の反応を描く32—33節を囲っている。「地と出会う天、そして地の無理解」がテーマである。

②受難予告の後に（28節）

㉓ 「これらの言葉」とは、21—27節の受難予告を指している。この受難予告から「およそ八日の

後に」と日時を書くのは、イエスの変容と受難予告との間の深い関係を示すためである。イエスが限られた弟子を連れて山へ登るのは「祈るため」であるが、これは受難が待ち受けるエルサレムへと旅立つ（51節）ための祈りかもしれない。

③ イエスの変容（29—31節）

㉞この祈りの中で、イエスの「顔の様子は違うもの」に変わり、その衣が「白く輝い」ていく。イエスの姿は変わっていくが、ルカはそれが誤解されないようにと注意を払っている。マルコはイエスの変容を「メタモルフォオー」という動詞を使って表すが、ルカはそれを避け、別の言葉で表現している。その理由は、ギリシア神話は「メタモルフォオー」を使って、動物や人間の姿に変身する神々を表すことがあるからである。イエスの変容は外形の変化（変身）なのではなく、神の子（35節）としての本質の現れである。従って、衣が白く輝いたのも、イエスの内面が衣を通して輝き出したということである。

㉟イエスと共に現れたモーセとエリヤが「二人の人」と呼ばれている。この表現は復活（二四4）と昇天（使一10）の場面でも使われる用語であるから、ルカは変容を復活・昇天と密接に結びつく出来事と捉えている。

㊱ルカはマタイやマルコとは違い、モーセとエリヤの会話の内容を明らかにする。彼らはイエスの「出発（エクソドス）」について語り合っている。エクソドスは出エジプトを指す表現でもあり、また死を表す婉曲表現（新共同訳「最期」参照）としても使われる。栄光に包まれた彼らがイエスの死について語り合うのは奇妙に思えるが、イエスの栄光は死と矛盾するような栄光ではなく、十字架に死ぬとき、最も輝きを発する栄光である。

㊲モーセ（モーユセース）

㊳モーセは神に選ばれたイスラエルの指導者であり、イスラエルをエジプトから連れ出し、約束の土地に導いた人物（使七20以下）。神がイスラエルと契約を結び、イスラエルに律法を与えたのも、モーセを通してである（出24章、ヨハ一17）。神から与えられた使命の大きさとその功績によって、モーセはイスラエルの歴史上で最も偉大な預言者とされる（申三四10）。

㊴モーセは律法や神の言葉の権威を体現する人物である。神がモーセに語った言葉をよりどころにして、イエスは死者の復活があると述べ（マコ一二26並行）、パウロはイスラエルの選びについて教える（ロマ九15）。また、モーセの名前がモーセ五書を代表することも多い（ルカ一六29・31、二コリ二三15など）。

㊵エリヤ（エーリーアース）

㊶エリヤはヨルダン川東岸の町ティシユベの人で、紀元前九世紀の前半に北王国イスラエルで活躍した預言者である。その働きについては、おもに旧約聖書の列王記上17章から列王記下2章に記されている。また、マラキ3章23・24節やシラ48章1—12節によると、エリヤは終わりの時に神から再び遣わされる預言者であり、イスラエルの十二部族を再興する人物とされている。こうした箇所に基づいて、エリヤはメシア的な人物、もしくはメシアに先立って現れ、救いの時の到来を告げる人物と考えられるようになり、「エリヤが来る」ことはイエスと同時代のユダヤ人には特別な意味を持っていた（マコ九11以下とマタ並行箇所）。

㊷洗礼者ヨハネやイエスは、再来したエリヤと人々から見なされる（ヨハ一21・25、マコ八28並

行など)。特に、共観福音書はイエスがメシアであるという信仰を表明するために、メシアに先立ってエリヤが再来するという預言が洗礼者ヨハネによって成就したと考え（マコ12など）、再来のエリヤとしての洗礼者ヨハネの死は、メシアであるイエスの受難の先駆けとされる（マコ9:12並行）。

⑦しばしばユダヤ人の間では、エリヤは天上にいて、地上の人間を苦難から救ってくれる人物と考えられた。こうしたユダヤ人の信仰は、十字架の上でのイエスの叫びを、エリヤに助けを求め、叫びと誤解する人々のうちに見られる（マコ15:35・36並行）。

④弟子の無理解（32—33節）

④弟子たちはゲツセマネの園のように睡魔に襲われている。彼らが眠気を吹き払って見ると、栄光に輝くイエスと「二人の人」が立っている。あまりのことに呆然とした彼らは、イエスのエクソドスについての会話を聞きもらしてしまう。

⑤そのため、モーセとエリヤが離れ去ろうとしたとき、ペトロは「三つの幕屋を造りましょう」と提案する。彼は幕屋を造ることによって、栄光に輝く三人を地上に留めようとしたのである。ペトロは目に見える栄光にとらわれ、エルサレムでのエクソドスに目を向けようとはしない。彼は言うべきことを「分かっていない」人であった。

⑤神の声（34—35節）

⑥ペトロの誤りを正すために、神が雲の中から応える。イエスは確かに「私の子」であるから、栄光に輝くのは当然である。しかし、同時に「選び出された者」として、神からの使命を帯びている。それはエルサレムでの「出発」を通過せずには、実現されない。弟子たちはここに留まって幕屋を造ろうとはせずに、イエスに聞き従い、その後を歩いて行くようにと教える。

⑥弟子の沈黙（36節）

⑦雲からの声とともに、モーセとエリヤは姿を消し、イエスが「ひとり見いだされた」とルカは書く。弟子たちはこのイエスに聞くべきである。栄光と十字架が矛盾ではなく、それが神の道なのだ、と知るためにはイエスに聞かなければならない。弟子たちの沈黙は戸惑いを表しているが、それは神の思いに沈潜するための第一歩となりうる。

⑦十字架を経て与えられる栄光

⑧イエスの受難は、弟子たちには「怖い」（45節）ことと映っていた。イエスの変容はイエスの死と栄光の意味を教える。十字架を通過するイエスのエクソドスは惨めな死で終わる「最期」ではなく、父のもとへと帰る「出発」である。エジプトでの奴隷状態からの解放を求めるイスラエルの叫びは神に聞き入れられ、カナンの地を与えられたが、イエスの祈りも神に聞き入れられる。栄光に輝くイエスの姿に神からの救いが約束されている。

⑨イエスが弟子の前で栄光に輝いたのは、復活を先取りして示すためであり、イエスの本質を表すためである。イエスが死んで、復活したのは、イエスを信じる者に豊かな命をもたらすためである。イエスの死が新しい命への「出発」であることを知って生きるようにと求められている。